

AOSYN が取組む地域との連携

～信用金庫の地域連携活動～

平岡治房

(青梅信用金庫 理事長)

1. 青梅信用金庫の概要

只今、ご紹介を頂きました、青梅信用金庫の平岡と申します。今日は、勤務先の青梅信用金庫、地元ではAOSYNと言う愛称で呼ばれています。私共がどのような形で地域との連携に取り組んでいるのかをテーマに話をさせていただきます。

まず初めに、大学地域連携学会の設立趣旨書には「大学はこれまでの研究・教育の他に社会貢献が求められる時代になった」と言う一文があります。世の中が変化していく中で、大学に対して、研究・教育以外の様々な取り組みが求められる時代になったのかと感じます。

一方、私たちの信用金庫業界では、業務と言えば、金融機関の3大業務と言われる「預金業務・融資業務・為替業務」が中心となりますが、世の中が変化を続ける中で、この他にも、各種相談業務・各種支援業務、また地域との連携や地域貢献活動など地域を支え、地域が発展して行く上での様々な事が求められる時代になって来ました。

この様な環境にありますが、信用金庫には、営業が出来る地域に制限があります。早く言えば「地元」での営業しか出来ません。「AOSYN」は、東京都の多摩地区・23区の一部・埼玉県の一部・そして山梨県の丹波山村・小菅村と、営業地域が決まっています。営業地域が決まっていると言う事は、地域が発展すれば信用金庫も発展する、反対に地域が衰退すれば信用金庫も衰退してしまうといった様に、地域と運命共同体なんです。

今日は「AOSYN」が取り組んでいる地域との連携について話をさせていただきますが、東京都内には23の信用金庫があり、全国では北海道から沖縄まで254の信用金庫があります。

皆さんのご自宅や職場の近くにも信用金庫があるかと思いますが、この254の信用金庫が、254の特色を出し、様々な形で地域との連携を図っている事を申し添えさせていただきます。

まず初めに、青梅信用金庫について簡単にお話しさせていただきます。青梅信用金庫は、大正11年の創業で、今年の3月6日、創立100周年を迎えた、東京都の青梅市に本店がある信用金庫です。先程東京都に23の信用金庫が有ると話しましたが、この中で、一番西に本店がある信用金庫です。

青梅市と言えば、市民マラソンの草分け的な存在の「青梅マラソン」の開催地ですと お話しすると、お解りいただけるのかと思います。川や山があり、自然が豊かな場所です。川には鮎・ヤマメ・イワナが住み、山にはシカ・いのしが住み時には熊が出た、そんな話もあります。余談になりますが、青梅市と言う所、夏は暑く、冬は寒いと言われますが、過去には2018年7月23日に最高気温40.8度を記録し、今もこれが東京都の最高気温記録となっています。また、2014年の2月の大雪では場所によっては積雪が1メートルに達した地域もあり、雪崩注意報も出された事があります。

2. 信用金庫と銀行の違い

本題に入る前に、信用金庫についてお話ししたいと思います。信用金庫と銀行の違いですが、金融サービスは同じでも、経営理念の違いで組織のあり方がそれぞれ異なります。

銀行は、株式会社であり、株主の利益が優先されます。また、大企業を含む全国の企業等との取引が可能で、信用金庫は、地域の方々が利用者・会員となって互いに地域の繁栄を図る相互扶助を目的とした協同組織の金融機関で、主な取引先は中小企業や個人です。利益第一主義ではなく、会員すなわち地域社会の利益が優先されます。さらに、営業地域は一定の地域に限定されており、お預かりした資金はその地域の発展に生かされている点も銀行と大きく異

なります。

そして、信用金庫は相互扶助の精神のもと、その社会的使命・役割の達成に向けて、①地域社会繁栄への奉仕、②中小企業の健全な発展、③豊かな国民生活の実現と言う3つのビジョンを掲げています。

さて、「AOSYN」は東京の西多摩地域を中心に営業を展開しています。自然が豊かである一方で人口や事業所が減少しており、地域の発展、成長に影響があることは否めません。また、自然が豊かで、地域資源が豊富な地域であり、この地域を盛り上げていくためには効果的な宣伝、PRが必要と考えます。そして、この様に地域を盛り上げると言った活動は「AOSYN」だけでなく、各地域で展開する多くの信用金庫でも同じことが言えます。

私たちの本業である円滑な資金供給をもとに、お客さまが成長し、ひいては地域が成長することで“地域活性化”のお手伝いを地域の皆さまと連携し、進めているところです。

3. 青梅信用金庫の目指す姿

このような中で、「AOSYN」は地域でいちばん“のめっこい”信用金庫を目指しています。“のめっこい”とは埼玉県の秩父・山梨県の丹波山や北関東地方で発祥した言葉といわれ、西多摩や埼玉県南西部の一部の地域などで使用されているようです。「すべすべしている」「のど越しがよい」などを意味していましたが、この「滑らかさ」を人間関係に置き換えて“親しみやすい”という意味でも使用されるようになりました。「AOSYN」が定義する“のめっこい”とは、「①いつもお客さまの身近にいること、②どんなことでも相談される関係であること、③親身になって対応していくこと、④地域とともに生きること」の4つです。これらを具体的に実践していくためには「お客さまのことを『よく知り』、お客さまと一緒に、問題の把握や解決策を『考え』、適切な金融サービスを『提供していく』」ことが重要と考え、これをビジネスモデルに日頃の活動を実践しています。

このように私ども「AOSYN」をはじめ各信用金庫では、地域と共生を図りながら営業活動を展開しています。そして同時に“地域の活性化”、“地域貢献活動”などを積極的に行っています。

“地域の活性化”については、例えば事業を営むお客さま向けに各種商談会やマッチングイベントを開催し、取引先企業同士を結び付けたり、通常ではなかなか出会えないような大手のバイヤーとの商談機会を設け、ビジネスチャンスの場を提供しています。

また、コロナ禍の下、今お話したようなイベントの開催が制限を受ける中で、コロナの影響を受けずにこれらの支援を行うため金融機関によっては独自にWEBを活用したマッチングサイトを構築しているところもあり、地域の企業同士のマッチングを継続的に支援しています。ちなみに「AOSYN」では新たな企業との出会いをビジネスチャンスにつなげ、地域経済が活性化することを目的に毎年、“あおしんビジネス支援マッチング大会”を開催しています。直近の3年間は新型コロナウイルス感染症の影響により開催を見合わせておりますが、創業から事業承継に至るまでのさまざまな相談や販路開拓につながる商談の機会を、地域の商工団体をはじめとした公的団体などの連携機関とともに提供しています。

また、コロナ禍における地域の事業者の皆さまへの新たな支援策として当金庫のホームページ内にマッチング専用のWebサイトとして“あおしんビジネスマッチング応援サイト”を開設し、販路の開拓を支援しています。

そして地域と共に歩み、地域と連携する信用金庫では各地域で様々な地域貢献、地域振興活動を行っています。各信用金庫の役職員が地域の行事・イベントに参加することはもちろん、自治体・商工団体への寄付などがあげられます。例えば、「AOSYN」では青梅市の一大イベントで毎年2月に開催される“青梅マラソン大会”において、役職員がボランティアスタッフとして大会運営に参加し、大会当日はランナーの受付を、お手伝いしています。また、創立70周年を機に創設した“地域文化振興基金助成金”は、小中学校の文化・体育・スポーツ振興を通じて地域社会に貢献することを目的に1992年以降、30年にわたり、本支店所在地の市町村に助成を行ってきました。

信用金庫を含めた各金融機関では地域の将来を担う子どもたちに対し、金融経済教育に力を入れています。子どものうちから投資を含めたお金に関わる教育を受けることで、その仕組みを理解し、お金の大切さなどを学ぶことが出来ます。長期的な視点で言えば、起業家を目指すための教育にもなり、起業家マインドの醸成にも結びつくものと考え、教育を受けた子どもたちが将来、各地域での起業につながれば、と期待しています。

ちなみに「AOSYN」では会社の起業、事業計画の策定、資金調達、商品の仕入・販売、収支決算の体験を通じて、お金の大切さを学ぶことを目的に、小学生を対象とした“あおしんキッズアカデミー”を2009年より開催しています。

2020年からは関東財務局や業務提携を行っているアイザワ証券さんと協力し、青梅市内の中学校において“金融リテラシー・キャリア教育”を実施しています。この信用金庫、証券会社、財務局の3者による金融の授業は日本で初めての取組みとして注目され、マスコミでも取りあげられました。

私たちは、これまでご紹介したような取組みを行っていますが、すべては我々がお世話になっている地域への恩返し、そして地域の持続的な発展のため“地域づくり”を応援していきたいとの想いからです。次に“地域づくり”に関しましてご紹介したいのが 青梅信用金庫が事務局を務める“美しい多摩フォーラム”です。ここからは少し、“美しい多摩川フォーラム”についてお話ししたいと思います。

4. 美しい多摩川フォーラム

今から15年以上前の2006年頃、青梅信用金庫では新しい地域貢献のあり方について考えを巡らせていました。この頃、西多摩地域の人口減少は既に始まっており、地域経済が低迷する中で、最初に話を致しましたが、地域との運命共同体である私たちは何か行動を起こさないと将来が非常に心配と、危機感を募らせていました。人口減少、つまり定住人口が減少する中で、どうしたら地域を活性化していくことが出来るのか。キーワードは、「交流人口の増加」であると考えました。また、地域経済の活性化は、1信用金庫だけで担えるものではなく、「広域連携、協働推進・相互扶助」が不可欠であると考えました。その旗振り役として、公平・中立な組織である信用金庫は適任であり、信用金庫の外部に公益的な地域づくりの推進組織を立ち上げる事としました。

広域連携を可能にする条件として、多摩川流域の行政と連携を取り付けることにしました。行政は情報の宝庫であると共に、地域の大きな柱でもあります。また、多摩川を地域のコモنز（共同利用地）の概念で捉え、シンボル化することとしました。特に、河川は地域の間を「流れて結んでいる」ため、それが各流域自治体間でコモنزとして認識され、行政と民間の連携・協働を生む素地となりました。また、河川は「いのちの水＝環境のシンボル」でもあり、持続可能な地域社会を実現するための大きなファクター（要因）となっています。

そして、2007年7月21日、当金庫は地域の活性化と自立を目指した地域づくり運動の公益的な実践組織として、官民連携による任意団体、美しい多摩フォーラムを設立しました。美しい多摩川フォーラムは当金庫のCSRの一環であり、CSRに係る負担は、コストではなく、地域への投資と位置付けました。直接的な収益にはつながりませんが、地域からの信用・信頼こそが信用金庫の「生き残り」の条件であり、青梅信用金庫の創業の精神である「共存共栄」につながると考えました。今年で設立15年が過ぎました。現在、持続可能な開発目標としてSDGSが掲げられ、各企業・各地域で取り組んでいられますが、この「美しい多摩川フォーラム」が取り組んで来た活動というのは、このSDGSの17のゴール、169のターゲットに合致する取り組みもあり、2015年に採択されたSDGSの前から取り組んでいた事になるのかと思います。

美しい多摩川フォーラムは、悠久（永久）の母なる川として、地域で最も共感が得られる「多摩川」をシンボルに掲げ、多摩川水系の流域周辺地域の各主体とイコール・パートナーとして、「美しい多摩づくり」を目指した運動を展開しています。経済、環境、教育文化を運動の3本柱に据え、水環境を守りながら、地域経済の活性化に取り組み、そして、次代を担う子どもたちへの教育を通じて、地域の人々（多摩圏民）が生きがいを持って、自立した生活が送れるよう、“持続可能な地域社会”を実現すること”を標榜し、人口400万人の多摩地域を対象に、多摩川をシンボルとする「美しい多摩づくり運動」を実践しています。

多摩川フォーラムは現在、1,200会員を超え、国（国土交通省）や東京都をはじめ、多摩川流域25の自治体が行政会員として参加する一方で、民間からは公益的な企業、一般企業、団体、NPO、大学、市民、子どもまで幅広い層が参加しています。今、25の自治体と話をしましたが、多摩川の源流域では、山梨県の丹波山村・小菅村の村長さんや、下流域では大田区の区長さん、また、この文理学部がある世田谷区の区長さんも行政サイドの運営委員として活動に協力していただいています。また、3本柱に則して組織された「活動部会」では、緩やかな合意形成を目指して議事運営が行われ、合意された事業は、会員の緩やかな連携のもとで実施されます。このように、多摩川フォーラムは会員が連携・協働して活動していくための「プラットフォーム」として機能しています。

美しい多摩川フォーラムでは、美しい多摩づくり運動を100年続けていこうと、2008年3月、経済、環境、教育文化を運動の柱に基本計画である「美しい多摩川100年プラン」を策定しました。次に、運動の柱としています、3つの活動についてふれさせていただきます。

まず、経済軸では、多摩川流域には桜の名所がたくさんあります。この点在する桜の名所を観光ルート化できないかということで、2009年3月、名所を札所と称して、「多摩川夢の桜街道～桜の札所・八十八ヵ所」を発表しました。「多摩川夢の桜街道」の公式ホームページも立ち上げております。毎春、桜の開花が始まる3月中旬から4月にかけて、八十八ヵ所の桜の開花情報を毎日更新し、この時期は1日のアクセス数が一気に4桁に増えるほど好評です。一般の方が観光協会に桜の開花状況について問い合わせをしたところ、「多摩川夢の桜街道のホームページを参考にしてください」と言われた話も聞いており、反響の大きさを感じました。

また、コロナが発生する前までは、はとバスツアーをはじめ旅行会社に桜の札所をめぐるツアーを組んでいただきました。桜の札所のどこかで毎年開催している、語り部・かたりすとの平野啓子副会長による「桜の語り会」は、人気のイベントです。今年の春は、青梅市にある吉川英治記念館で無観客開催し、後日、地元のケーブルテレビで放映していただきました。

また、西多摩には5つの酒蔵があります。酒蔵と紅葉と温泉をめぐる旅として、2014年9月に「多摩川酒蔵街道」を発表しました。2019年よりスタンプラリーを導入し、この運動をさらに盛り上げていこうと取り組んでおります。特に、昨年の秋に実施した「多摩川酒蔵街道」スタンプラリーには、コロナ禍の中でしたが、たくさんの応募があり、多くの方に楽しんでいただきました。

一方、大勢の方に来ていただいて、にぎわうということは、確かに地域を活性化することにはなりますが、反面、ゴミが増えたりするなど環境面においては負荷がかかる場合もあります。そこで、環境軸では、自然保全の観点から、300を超える調査地点で多摩川一斉水質調査を毎年6月に実施して、水質マップを公表しております。11月には、流域の自治体、企業、市民が連携した清掃活動「美しい多摩川クリーンキャンペーン」を実施しております。また、水循環に関する地域のリーダーを養成するため、多摩川“水”大学講座を開催しています。

さらに、この運動を末永く、子どもたちや孫の代まで継承していこうという取組みにも注力しています。教育文化軸では、フォーラム運動を次世代に継承するため、子どもたちを対象にした「炭焼き体験と水辺の交流会」を8月に開催し、また子どもたちだけで司会進行から発表までおこなうユニークな「多摩川子ども環境シンポジウム」を12月に開催しています。文化面では、多摩に伝わる言い伝えや昔話を掘り起こし、「多摩の物語」として冊子にまとめ、「語り」活動をおこなうなど、バランスがとれた地域づくり運動を目指して活動しております。なお、コロナ禍において、人を集めてイベントを開催することが難しい状況では、WEB開催や動画をWEB配信して活動しております。

5. さいごに

最後に、フォーラムの10周年記念行事としてドローンを使い多摩川の源流域から、最下流になる東京湾までの間を桜の咲く時期に空撮を行った映像に合わせ、美しい多摩川フォーラムが2010年に制作した「多摩川の歌」をご紹介します。

作詞は谷川俊太郎さん、作曲は寺嶋陸也さんをお願いし、歌は色んなバージョンがありますが、今回はボサノバの歌手の、小野リサさんが歌ってられるボサノババージョンでお聴きいただきたいと思います。

「多摩川の歌」はCDとDVDも制作しました。この歌が、100年先まで歌われ続けることを願って、多摩川フォーラム、そしてAOSYNが取組む地域との連携についての話を終わりたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。